

# 教授法研究： 「ヨーロッパ文化総合研究」での試み

横 川 典 古・鹿 毛 憲 一\*

## 00. はじめに

本稿の主旨は、キリスト教科人間文化コースに設けられている「ヨーロッパ文化総合研究」における教授法の紹介と、2年を経過した時点における実施報告にあるが、本論に入る前に、この科目が成立に至った背景を簡単にまとめておきたいと思う。

キリスト教科では、それまでのカリキュラムの内容をより具体的でわかりやすいものとする 것과、より学生のニーズに合った科目を設置することを念頭におきながら、“共に生きる”という科の教育理念を実現させるものとして＜人間文化コース＞と＜人間福祉コース＞という2つのコース制を、1997年度よりスタートさせた。キリスト教科は1952年の発足以来、何回にもわたってカリキュラム改革を実行し、内容の拡充を図ってきたが、現在の人間文化コースにおいても継続している主たる目標は、文化を通してのキリスト教理解、文化を通しての人間理解ということである。

こうした流れの中で、新しい科目である「ヨーロッパ文化総合研究」を新しい教授法で展開させる案が出された。新しい授業の開発に対する強い動機には、2つの要素があった。ひとつには、科としての理念やカリキュラムが目指しているものが、どの程度具体的に理解され、有効に機能しているかということに対する疑問があった。キリスト教科の科目は、科の性質上多種に及んでいたた

め、カリキュラムとして専門性が希薄であることが指摘されていた。コース制の導入によって、このことはかなり明確になったが、さらに各科目を緊密に結びつけ総合化するといういわば学際的アプローチができる科目を模索していたのである。もうひとつの動機は、学生の質的变化に伴う従来型の授業方法の困難さを痛感させられていることにある。この点に関しては近年関心が非常に高まっており、教授法に関する著作物が多数出版されるようになった。従って教授法に対するアイデアや工夫を得るのに事欠かない状況にある。しかしいざ実践となると、与えられている条件や環境が様々に異なるため、なかなか思うようにいかないのが実情ではないだろうか。森田保男氏が『大学教授法』<sup>2)</sup>の中で指摘しているように、提供されているアイデアや工夫を参考にしながら、独自の授業スタイルを開発していく必要があると思われる。「ヨーロッパ文化総合研究」という科目に対する取り組みは、まさにそうした独自のスタイルを作り上げていく実験的な試みとして行われているものである。

## 01. 科目のテーマ：イタリア・ルネサンス

ヨーロッパ文化の中で「イタリア・ルネサンス」をテーマとして選んだ理由は、以下の要因による。まず、内容がキリスト教科のコースの教育目標のみならず科の教育理念にもよく合致しているものであるということ、さらに最近の学生が興味を持って楽しく授業に参加できるものという条件がそろっているためである。現在のイタリアブームということもあって、イタリアに関するわかりやすく楽しい資料が多く出回っているが、そのイタリアに関する学びが出来ることで、学生達にとって魅力あるテーマと受け取られている。

担当する教師3人にとってこのテーマは専門の研究対象ではない。しかし敢えて選んだ理由は、“共に学ぶ”授業形態をも考慮に入れたためである。専門となるとつい微に入り細に細入りの知識を一方向的に伝授するというフォームになりがちである。従来型の授業方法を避けるために、むしろ専門でないことを生

かして、学生と共に勉学の楽しさや考えるプロセスを分かち合っていくあり方を大切にしていきたいと考えているのである。

## 02. 担当者

この科目が学際的な総合化を目指したものであることはすでに述べた。それは思想・文学・美術の3分野から組み立てられている。学生は1年時において、「思想にみるヨーロッパの文化」「文学にみるヨーロッパの文化」「美術にみるヨーロッパの文化」を必修することになっているが、その各々の担当教師3人が、2年時に修得する「ヨーロッパ文化総合研究」の担当者でもある。

3人の教師は全授業と一緒に出席するほか、授業後毎回打合せミーティングを持つ。この中で、授業内容についての検討と共に、お互いの教授方法に対する感想や意見も述べ合う。自分ではなかなか気づきにくい点を知るチャンスであり、教授法を磨く刺激となる。アメリカの大学では、教師相互の授業観察が日常的に行われ、聴講した教師から出るコメントが、学生にも強い印象を与えているという。<sup>2)</sup>

またミーティングの中では必ず次回の授業展開についても話し合うが、それは年間スケジュールすなわちシラバスを作成していても、学生の参加型授業であるため、学生の反応と動向を見ながら、よりふさわしい授業のあり方を模索するためである。従って、スケジュールは固定されたものではなく、流動的なものとして考えている。

## 03. 年間スケジュール

開講日数の半分は、担当者による講義とシンポジウムに当てる。講義は各々の分野からテーマを理解するために必要なエッセンスをリレー形式で行う。新しい試みとして力を入れている授業スタイルのひとつがシンポジウム形式であ

るが、98年度は特にテーマをヒューマニズムに焦点を絞り、ルネサンス時代の人間像・人間観が浮かび上がることを意図して、3回行った。これに対する学生にアンケート調査による結果は、なかなか好評であった。シンポジウム形式においては教師の考え方や人柄が学生に親しみ深く伝わることと、通常の授業スタイルとは異なる面白さが、学生達の興味を引いているようだ。これに関連して、梶田叡一氏が「大学教育における評価と授業改善」というテーマの基調講演（97年6月に立命館大学教育研究室が開催したシンポジウム）の中で報告されている内容は非常に興味深い。3つの国立大学の学生に行った調査結果から「熱意・人柄などが良い教官の講義を聴きたい」というニーズがあることが指摘されている点である。<sup>3)</sup> 教師側にとっても通常の講義形式の時より自分の意見や価値観を自由に表現しやすく、結果として熱弁を振るうことができる方法であることを発見した。しかし当初目論んでいた、学生をもシンポジウムに参加させることに関しては、今のところあまり成功していない。シンポジウムの最後に学生からの質問が出るだけでなく、より双方向性を高めるためには授業時間以外での学生を交えたかなりの準備が必要とされるであろう。

授業日数の残りの半分はグループワーク形式で授業運営が行われる。その内の3分の2は、ビデオ資料を使用している。これについては、次の章でもう少し述べたい。スケジュールの最後に位置している残り3分の1の授業もグループワークに当てられている。グループ毎にテーマをもった特色ある“イタリア・ルネサンスの旅”のプログラムを作成して貰うのであるが、実際に同じタイトルで企画されている本学の海外研修旅行と連携している。この研修旅行への参加人数は受講者数の1/3から1/2くらいを占めている。全員で参加できるのが理想的であるが、実際に旅行しなかった学生においても、このプログラム作成を通して旅行の擬似体験ができるようである。

## 04. メディアの活用

映像教材は、ビデオをはじめとして、LD、CD-Rom など最近多く出回っているが、この授業ではビデオ資料を多用している。アンケート調査から、こうしたビデオを使用する授業の満足度はかなり高い結果が出ているが、問題もある。若い学生達にとって映像メディアは最もわかりやすく、取っつきやすいものであるが、反面日常的に懂れているものだけに、情報をただ漫然と受け流しやすくもある。そこで、問題意識を持ちながら積極的にみる姿勢をうながす工夫が是非とも必要となってくる。質問項目をリストアップするなど、事前準備は相当手間暇がかかる。授業運営では、個人へ向けての作業とグループへ向けての作業とをバランスよく行うことが大切であることが2年間の実施経験から感じられる。具体的な事例は、次の章で述べるが、その前に“メディア・リテラシー”の課題について少し触れておきたい。

日本でも研究が進みつつあるメディア・リテラシー論は、今後教育の中でますます重要度を高めていくと考えられ、この授業においても映像メディアのほか、電子メディアを駆使することを将来的課題として持っている。

この科目の目的は、メディア・リテラシー研究（メディア・スタディズ）にあるのではないが、レン・マスターマンが「メディア・リテラシーの18の基本原則」の中で語っている基本概念は、これからの教授法を考える上でも大きな示唆に富んでいると思われる。また実際我々が試みている方法と非常によく共通する部分が見出されるので、その部分を引用しておきたい。

13：メディア・リテラシーの取り組みは、基本的に能動的で参加型である。参加することで、より開かれた民主主義的な教育の開発を促す。学ぶ者は自分の学習に責任を持ち、制御し、シラバスの作成に参加し、自らの学習に長期的な視野を持つようになる。端的に言えば、メディア・リテラシーは新しいカリキュラムの導入であると共に、新しい学び方の導入でもある。

14：メディア・リテラシーは互いに学び合うことを基本とする。グループを中心とする。個人は競争によって学ぶのではなく、グループ全体の洞察力とリソースによって学ぶことができる。<sup>4)</sup>

## 05. グループ学習

グループ学習については、従来からキリスト教科では「旧約文書研究」「新約文書研究」の授業方法として高い評価を得てきたし、「人間論演習」もまた、学生主導のグループ討議で大いに実を上げてきた。さらにまたキリスト教科共同研究室は元来グループ学習にふさわしいように作られていたもので、この「ヨーロッパ文化総合研究」の授業でも有効に機能することが予想された。

だからこの授業の特色の一つにグループ学習もその視野のなかに入れていた。これは年間を通してみれば、前期（7月までの12回）および後期の最後の3回が形のうえでは、教室もキリスト教科共同研究室を使い、よりそれにふさわしい環境を設定したつもりである。

受講登録数は30（98年度）であり、5人1グループの6グループである。

これは年度当初にこの授業のねらいと目標を説明し、授業概要オリエンテーションのなかでそのグループ分けを発表した。ほぼ1年を経過して（2年生科目）クラスの雰囲気は理解した上でのグループ分けだったが、人間文化コースのコース必修クラスに、科目等履修生1名、再履修者1名、人間福祉コース学生4名などが加わっていた。イタリア・ルネッサンスがサブ・テーマということで、それにふさわしく次の6人のイタリアの巨人たちからグループ名もつけた。すなわち、「ダンテ」「ペトラルカ」「ボッカッチョ」「レオナルド」「ラファエロ」「ミケランジェロ」である。

それぞれ1つのテーブルに5人が座り、前期にあってはビデオ教材を使い、それに基づいたグループワークの課題について話し合いをもつことにし、あるいは翌週までにグループで調べものの課題を与え、グループ報告を設定した。

またこの授業の年間のまとめとしてグループ作業としての「わたしのイタリア・ルネッサンスの旅」のガイドブック作成を設定した。これは年間を通して、さまざまな観点から学んできたイタリアルネッサンスについて、より具体的に、各個人に身近な現実として感じて貰うために、各グループでそれまでの授業を総合化してもらう方法として設定した。これには詳細なマニュアルを作り、作成の目的、作成上のポイント、作成の手順などを示した。

具体的には、まず個人課題として持ち寄った「私のイタリア・ルネッサンスの旅」をグループの「私のイタリア・ルネッサンスの旅」としてまとめ、発表することが求められた。そのために、まずはグループ討議によって旅のテーマを話し合って貰い、最終的に模造紙3枚（旅のテーマ、日程表、地図）を使って発表することとした。さらにそれらをフロッピーに入れて提出させることにした。もちろんこれは年度のまとめとしてスタッフ側で編集し、製本して配布するためである。

## 06. ノート及びファイル作成

授業のノートとしては、決められた次の4種類の用紙を使い、授業修了時に回収し、翌週授業開始時に返却し、学生はそれを4月の最初の時間に購入したB5ファイルにファイリングしていくようにした。それは、毎回の授業において学生各個人が、それまでの授業を繰り返し振り返り、年間の教育目標というマクロ的な視野のなかで、各授業がどの位置にあるかを把握し、より具体的な目的意識を持って毎回の授業に臨むことができ、毎回の授業がその場限りのものとならないように配慮したつもりである。

4種類の用紙とは次のものである。ヘッダとして、科目名、日付、組・番・氏名および各種類を示すロゴとそのタイトルを書ける欄を設けた＜Lecture＞用紙、＜Video＞用紙、＜Assignment＞用紙、＜GroupWork＞用紙の4種類である。（資料1）

( 9 月 9 日

( 組 番 氏名: [REDACTED]

LECTURE: イタリア・ルネッサンスにおける思想の面から

NO. 1

前回講義 6/24

1. 人文主義 (キコ)

2. 東西教会、東西世界の分離

&lt; 本日 ~ 9/9 &gt;

1. ビザンチン文化の西ヨーロッパへの流入

東西教会の分裂

14-15c. 一か張りの年々の回復への悲願

1391. ビザンチン帝国から皇帝一行、オスマントルコからの脅威に対して救援を要請

書記 - マヌエル・クリュソローラス

に來る

フィレンツェ市政府の書記官長のサレターリ

1396-1403 クリュソローラス、フィレンツェでギリシア語を教授

フランチェスコ・フィオルフィ、ギリシア語の文法書、辞典をつくる

( 発音 → 意味に合わせる )

1438 「フェララ公会議」

ビザンチン政府の代表団、オスマントルコの圧迫に対する救援のための

その条件 - 東西教会の合同の問題を解決したいと申し入れ

ギリシア語学者

ゲミストス・プラトン

ヨハネス・バツサリオン

1439 「フィレンツェ公会議」

プラトンの講義 - 熱狂してむかえられる

受講者に グルーニ (書記官長)

コジモ・デ・メディチ (メディチ家当主)

ギリシア語、文法、歴史の重要性を痛感、10年後、自費で研究の

ための学院を設け

( サロニキの )

→ 「プラトン学園」 Academia Platonica → 古代ギリ

古代アテネのプラトン、アカデメイアの復興

( プラトン )



( 6 月 17 日

( 組 番 氏名: [REDACTED]

VIDEO: フォレンツェ、ルネッサンス

&lt; 最初の近代的共和国 &gt; ※ 夢の街 - 努力すれば実現する夢

フォレンツェ - 現存する建造物のほとんどが 500 年位昔のもの

所々にある紋章 → マディチ家の紋章  
 (シオバルダグロ、ミラジエロ)  
 家柄よりも実力を重視した。  
 実力主義 - フォレンツェ

自由ではない

中世ヨーロッパ - 暗黒時代 (疫病, 飢饉, 戦争)

↓  
"不自由な時代から立ち上がる"

市民は土地に縛り付けられる。

→ 生きるため、死ねるため、領主次第

神に祈ることのみ許される。

(22才) ジョバンニ・デ・マディチ

(マディチ家の開祖・毒屋) → 商才があった。(旅を繰り返して資金をためた)

※ マディチ商会 → 為替

危険を供与... 旅人が安心できる制度を作

自国通貨の保護政策がとられる各国

教会は  
高利貸し  
と批判

聖ジョバンニ洗礼堂 (街の家紋)

ギベルティ 優美且つ華麗

ブルネッスキ 緊張感と力

(ギベルティに支持はなかった)

この負けに負け、彫刻を断念し

建築家に - 二重構造の屋根

(大い) 地上から 100m

なびやかな優しい曲線

地獄への片道切符

市民混乱

フォレンツェ恐慌

フォレンツェの家紋

(才能を認める事)

挫折、困難に  
負けず成功を  
勝ちとる

マディチ家 - ローマに言い寄る → 法皇受け入れる

自分の目で見、  
目で聞いたもの  
(か信用しない)

終生のモト

(ジョバンニ) 悪意がある

→ マルティネス 23 世墓をつくる

13-14

13-14

恐慌を脱する

ドナテロ

遠近法

98. 6. 18

( 月 日 )  
( 組 番 氏名: )

ASSIGNMENT :

P.22

処刑開始

6月27日 朝、秘書シンニ、外科医ヴェルサエリ 絞首刑

7月4日 夜 ペトラルツタ 絞首刑

7月17日 リアーリオ、条件付きで釈放

7月27日 サラリモ、 " (リアーリオより厳しい)

マルティン・ルター : ドイツ人修道士

聖職者の妻帯は〇とした、更罪符、

ルター派 — 見ざる教会のみ救済を与える、主キリストと1人2の信者が直接つながりキリストと作られる為、全ての人にまじめでひたむきな力がある信じる

カトリック — 人間性には善も悪も含まれ、仲介者となる見ざる教会、地上の教会が

① スパイン大使ドン・ディエゴ・ロハツは主君のスパイン王とドイツ神聖ローマ帝国皇帝を兼ねる、カールロスから、ルター派の運動に対して、スパインと法王庁の共闘体制を1日も早く確立する必要があるとの特命を帯びて、訪問

→ 法王は拒否

② 四旬節(40日間)の間中は、食をつつしめ、身体を清める。  
まじめになって、復活祭を迎える。

1月6日の主節からはいまだ謝肉祭の最後の1週間は食べられるだけ食べ、飲めるだけ飲み、騒げるだけ騒ぐ → 謝肉祭の最高潮

98.9.09

( 4 月 22 日 )

Group Work :

氏名	意見
1 [REDACTED]	現代と似通った時代である。 今までは個人の主張を持ち、21世紀に向けて、 内面から改革をすべきだ
2 [REDACTED]	
3 [REDACTED]	個人を大切にしたらこそ、素晴らしい文化、芸術 も生まれた。
4 [REDACTED]	日本との文化の進め方も違うのに素晴らしい 改革。 文化、芸術に目がいきがらたが <sup>思想</sup> (他の部分) にも目を向けた。
5 [REDACTED]	14世紀のバーストや経済危機を乗り越えて、 (30年のあいだに) レネッサンスを確立したのは すごいことだ。

## [グループとしてのまとめ]

病気や、経済危機などの困難な時代を短期間で乗り越え、  
芸術、文化 など 偉大な芸術家等も生きた。このことは、  
素晴らしい時代であったといえる。

現代は、この古い状況と大変、似通った所があり、  
見習う点も多い。個性はあるが個人の主義、主張  
のない昨今、自己の内面の変革を考へ直す必要がある。  
21世紀に向けて、レネッサンス文化を見返すのも大切である。

98. 4. 22

これらは授業内容毎に、2 穴の穴を開けて配布あるいはテーブルの上に用意しておく。そして授業終了時に回収し、翌週授業開始時に返却し、学生は B 5 ファイルにファイリングしておくというわけである。

また毎回の授業には必要な資料を用意した。これもまた 2 穴の穴を開け、授業開始時にその日使う用紙とともにテーブルに用意し、自由に取れるようにしておく。学生はこれもまたファイリングしていくというわけである。

## 07. 課題

毎回の授業のなかでも、ビデオ教材を使う場合など特にそうであるが、漫然とビデオをみるのではなく、小課題を与えた後で（あるいは小課題に答えながら）ビデオを見る、あるいはビデオの後で話し合えるような課題を与えるなどした。さらに授業時間外で行う課題についてもいくつかの課題を与え、グループで答える課題、各個人が調べる個人課題など、より重層的にイタリアルネッサンス（授業テーマ）に迫って貰うこととした。主な大課題（まとまった課題）としては次の 3 つである。

- 1 GW前：シンポ「ルネッサンスに何を学ぶか」（テープ）の要約。
- 2 夏休み前：塩野七生「神の代理人」（中公新書）の要約。
- 3 冬休み前：レポート課題「イタリア・ルネッサンスにみる人間観」（サブテーマ

を12月始めに提出し、まとまったものを最終授業時までにフロッピーに入れて提出)

特に 2、3 については枚数に制限を設けなかったので、提出物に甚だしい差が起こった。

## 08. 教室と設備

教室としてはキリスト教科共同研究室（2104）とA V教室（4024）を使用した。これまで述べてきたように、この授業では授業展開に合わせて様々な工夫を試みているが、それは教室についても同様である。共同研究室は本来「旧約文書研究」「新約文書研究」のグループ学習の実を上げるべくテーブル・椅子など可動式であり、テーブルも5～6人で囲めるタイプのものが設置されている。さらにビデオ、LD、スライド、スクリーンが使用可能で授業にも大いに活用している。ただ、講義中心の授業となると黒板（白板）に向かう姿勢において無理があるので、その場合はAV教室（スライド、ビデオを使った講義も可）を使うことにしている。

その他共同研究室の設備としては、VHSビデオ、8ミリビデオ、LDの各デッキと30インチモニター2台が用意されていて、さらに年間のまとめに使用するコンピュータ4台が使用可能であり活用されている。しかしビデオモニターに関して、昨年一度だけ液晶プロジェクターを使用し、特に美術作品の解説やスクリーンに映し出された大画面の迫力は、教室で学ぶ文化を学生達の近い現実引き寄せる圧倒的な効果をもたらしたが、その準備（貸出、運搬）の大変さがネックとなっていて一度きりの使用になってしまった。持ち運びを簡便にするか、共同研究室据付のものがあればどれだけ有用かと思われる。

さらに忘れてはならない設備としては図書である。この授業全体に関わるルネッサンスに関する図書は、学生達が授業時間以外にも使用できるように（但し帯出禁止）、書棚にコーナーを設けた。特にグループワークに必要な市販のガイドブックは主なものをグループ分揃えることとした。

## 09. アンケートにみる学生の授業評価

これまで紹介してきたように、この授業では様々な要素を授業方法として試みてきたが、年間の授業を終えるにあたって学生達にこの授業を振り返って貰った。質問項目は次の7点であった。(資料2)

- 1 ビデオを多く使った点について
- 2 決められた用紙を使うことについて
- 3 課題について
- 4 パネルディスカッションについて
- 5 グループワークについて
- 6 講義について
- 7 その他授業全体について

総じて、それぞれの項目について好意ある意見が大勢を占めているが、幾つかの点で学生の不満をみることができる。特に＜課題＞について、その量の多さ、多様さが大変だったようで、今後に活かしたいと思う。特に最後の課題をクラリス.v.4の指定としたことは、最終授業後も連日共同研究室のコンピュータの前で夜遅くまで打ち込む学生が多かった点など、(学生のコンピュータへの未習熟とマシントラブルがあって、頻繁に呼び出しがかかった)形式の指定が若干の混乱を招いたかもしれないという反省が残り、今後の検討課題とした。その他アンケートにみられる学生の指摘には耳を傾け、次年度の年間計画の中で修正、工夫して対応していくつもりである。

## 資料 2

[ヨーロッパ文化総合研究98]

組 番号 氏名

### 1 ビデオを多く使った点について

- ・ただ、話を聞いているだけよりも、実際に映像を見る方が理解しやすかったので、良かったと思う。
- ・ビデオを多く使うのはすごく良かった。口で言うよりも絵が入っていたし、わかりやすくてよかった。
- ・後期にビデオを使う機会が少なくて残念だ。
- ・わかりやすくてよかった。
- ・実際に目で見れたしわかりやすかった。
- ・どのビデオもとてもわかりやすく、イタリアルネッサンスについて理解するために良い教材だと思う。
- ・映像を楽しむことが好きなので、もっと見たかった。
- ・解説付で進むので、美術品のことがよくわかった。やはり本を見るよりわかりやすい。
- ・ビデオで絵画や人物の紹介を見たのがわかりやすかった。わかりにくいところもわかるようになったと思います。
- ・芸術家の一生のビデオは大変興味深く面白かったが、旅行の案内のビデオはあまり面白くなかった、古いせいかも。
- ・話を聞いてわかりにくいところなど、ビデオを見てわかりやすかったので良かった。
- ・言葉で説明するだけでなく、実際の色とかがわかって良かった。
- ・ビデオを使ったことはすごくわかりやすかったし、見てて、興味があつたのが出てきて、その時は良かった。
- ・わかりやすくルネッサンスのことを理解できたと思う。
- ・面白かった。イタリアには行ったことがなかったので見れて良かった。
- ・イタリアに行ったことがあるので、イタリアのビデオを見るのが楽しかった。
- ・旅行のビデオが面白かったし、為になった。
- ・目が疲れる。眠たくなる。でも解りやすく良いと思う。
- ・面白かった。
- ・内容が細かくて良かった。解りやすくて良かったと思う。話だけではなかなか難しいジャンルだったので良かった。
- ・わかりやすくて良かった。
- ・話だけで授業を受けるよりもビデオを使った方がわかりやすくて面白くて良かった。

### 2 決められた用紙を使うことについて

- ・便利で、失くしにくくて良かった。
- ・楽で良かった。ノートを書く気になった。
- ・わかりやすかった。
- ・書きやすかったし、忘れる心配もなくて良かったと思います。ファイルじゃないと多分なくしてたと思う。
- ・良かったと思う。
- ・後で見たら綺麗やし、いいと思う。
- ・整理しやすくて良かったと思う。
- ・特に問題はなし。
- ・あまり関係ないと思うけど、統一されていて良かったと思う。
- ・決められた用紙を使う方が楽でいいと思う。
- ・特に何も思いませんでした。でも日付が入れられて良かった。
- ・この授業のノートを自分で用意しなくて良かった。課題用、授業用、ビデオ用と分かれていて良かった。
- ・レクチャーやアサイメントを使い分けるのが少し面倒だったけど、後で見やすかったから、良かった。
- ・決められた用紙の方がまとめやすいし、紙を忘れて他の紙に書いたりしてなくすことも少ないのでもいいと思う。
- ・用紙を統一してほしかった。
- ・ファイルに収めやすくて良かった。
- ・何をどの紙でというのがわからなく、ぐちゃぐちゃになったので1つに決めてほしかった。
- ・まあまあ。個人的には、線が薄い方が良い。無地の紙が使いやすかった。
- ・良いと思う。ただ、線のない用紙が使いやすかった。
- ・楽でいい。
- ・自分で用紙を用意する必要がなかったのがよかった。
- ・書きやすかった。でも日によって穴が開いていたりいなかったりで、常に一定して買った方が良かった、ぜいたくかしら。

### 3 課題について

- ・私はワープロが苦手だから、ワープロに打ち込むのが嫌です。
- ・課題は多くはなかったと思うけど、中身が難しかった。
- ・「神の代理人」はまとめづかった。個人の課題をもう少し減らしてほしい。
- ・マニアっぽくて少し難しかった。
- ・「神の代理人」とか、本がなくてわかりづらいし、苦しかった。1回に出す課題の量が多い。
- ・授業の後に出る宿題（個人で調べる簡単なもの）は良いが、ゴールデンウィークや夏休みの時に出た課題が苛酷だった。
- ・なかなか難しかったが、興味深いものが多く、勉強になった。
- ・やりがいのある内容だった。特にヨーロッパのガイドは面白かった。
- ・イタリアルネッサンス期に登場する主な人物の個性や人柄やそのまわりの背景もみえ、レポート作成は少し嫌だった

けど、調べるに従い楽しんできました。

・「神の代理人」は、分厚い本だったので大変だったけど、面白かった。マックを使うのは、いまいち嬉しくない。本にされるとなおさら緊張する。

- ・結構多かった。1回にすることが大変だった。
- ・1回にする量が多かった。カセット聞くやつがしんどかった。
- ・結構多かったと思う。もう少し減らしてほしかった。
- ・夏の課題は大変だった。
- ・夏休みの課題より、今の課題が一番難しい。
- ・課題は少ない方がよい。
- ・少し多かった。
- ・多すぎ。2

・最後の課題が大変そう。一気に大量なのが多くて困った。

・パソコンを使う課題は大変。

・フロッピーを使うのが大変だと思う。

・ちょっと大変だった。後期の今からだすやつがパソコンを使ったりしないといけないので難しいと思う。

#### 4 パネルディスカッションについて

・先生方が一生懸命とろろんしていろいろな話が聞けて良かった。

・先生が3人もいる授業は始めてなので、なんかすごいと思った。

・文化、思想、芸術それぞれの話を聞くことができた。

・先生3人いっぺんの授業は始めてだったんで少し驚きだった。

・先生が楽しそうだった。

・見栄のはりすぎ、生徒に対してでなく先生同士の闘いがうっとうしかった。先生の質問、解りにくいし、別の所でしてほしかった。

・わからない。

・先生たちの話が白熱していてすごかった。

・先生が3人で話しているのを聞いて、すごかった。

・良かった。

・大学の授業という感じで、難しい話になっていると思いました。

・あまりやっていないので何とも言えない。

・テレビを見ているみたいで面白かった。いかにも大学の授業みたいで良かった。

・かしこい話で先生らだけついていけてて私はついていけなかった。

・内容が深く、ちょっと専門的すぎてよくわからなかった。

・替段の授業とは違って面白かった。

・メモを取ったりして、自分も参加している気分になった。少し難しい話のときもあった。

・内容が濃く、少し難しかった。

・一人の先生が長く話さないで、3人で少しずつ話されていたのは良かった。

#### 5 グループワークについて

・みんなでやった方が楽しいし、だらだらししないから、良いと思う。

・遅刻が多かったので、グループに迷惑をかけてしまったけど、グループでやると、個人でやるより色々な意見が出ていいと思います。

・協力してできたので良かったと思う。ガイドブック作成にはもう少し時間がほしかった。

・協力できて良かった。面白かった。

・協力できた。楽しくできた。

・楽しかった。それぞれの考えていること（または意見）がとても参考となった。

・いつも全員が出席している訳ではないので、難しい点だと思う。

・話し合いはこのくらい的人数がやりやすい。人の意見も参考になる。

・グループのみんなと仲よくできました。協力しあえたと思います。それぞれが自然に自分の担当を決めてできました。

・グループ作業だと遅刻、欠席などで全く関わらない人も。いる時は「仲よく」はできたけど。

・グループで話し合ったりするのはめったにないことだから良かった。でも、班で多く休まれると辛かった。

・みんなで相談しながらできたし、楽しかった。

・グループワークは別に嫌じゃなかった。グループで1つの課題は結構大変だった。

・みんなで協力しあってできたと思う。けれど、もっと授業で時間を作ってほしかった。

・よいグループに恵まれた。

・1人でするより、グループのみんなと作業をする方が楽しかった。

・別にいいと思う。

・良かったと思う。

・楽しかった。けど、やる時になかなかまとまらなくて大変だった。自分たちだけでやるのは大変だったと思う。

・グループで討論できて楽しかった。

・楽しかった。



## 資料2 (続)

- ・みんなで集まったりするのは大変だけど協力できて楽しかった。

### 6 講義について

- ・先生の話を一方向的に聞くだけでなく民な意見を聞けたり自分の意見も言えてみんなで作る授業とという感じがして良かった。
- ・あちこちの黒板を見るので黒板によっては背中が辛い。
- ・講義は、研究室でしない方が黒板をまっすぐに見れるのでいいと思った。
- ・4024の時、先生の文字が小さすぎて見にくかった。
- ・良かったと思う。
- ・解りにくかった。
- ・ヨーロッパのことをいろいろな視点から深く知れて良かった。
- ・よくスライドを見せられた。が、楽しかった。
- ・知らない町のことを学ぶことができたし、1年の時に習ったことの復習みたいで良かった。
- ・ビデオ見たりするのは興味を持って見ていたけど、話だけのときは結構辛かった。
- ・いろんな角度からルネッサンスの美術を学ぶことができて面白かった。
- ・ビデオなどイタリアルネサンスについてもっと見たいと思った。
- ・文学については、1年の時にやったことと重なっていたので、他のことにも触れてほしかった。美術も思想も、もう少し詳しい内容にしてほしかった。
- ・難しかった。もう少しわかりやすくやってほしかった。
- ・難しかった。グループでやるのは楽しかった。
- ・大変良かったし、勉強になった。
- ・今までの知識と、全く知らなかったことと、改めて学ぶことが多かった。
- ・ヨーロッパと範囲が決められているので、何を探究したいかがよくわかった。
- ・最初の授業では難しかったと思ったけど、学ぶに従い、わかってきました。
- ・やはり好きな分野だと集中できましたが、教室が広く、疲れているときは、さっぱりできなかった。週毎に先生が代わるのは楽しみでした。もう少し森山先生のを受けたかった。
- ・話を聞くだけで、少し辛かったように思う。
- ・ルネッサンスに生きた人達を多く知ることができ、面白かった。
- ・3人の先生の個性が強すぎたと思う。一人ひとりずつ授業を受けるのは良いが、3人の先生が一斉に授業をすると、あまりよくないと思った。

### 7 その他授業全体について

- ・ヨーロッパの文化が、文化、思想、美術の3つの方面からみることでできて、奥深かった。
- ・講義を聞くだけでなく、グループで討論することができて良かったと思う。
- ・全体を通して苦にはならない講義だった。毎回一枚提出だったから、「提出だ」って思うとやれるから良かったと思えます。
- ・面白かった。
- ・何か先生同士の質問とか、私にはわからなかったし、その質問のせいで授業終わるの遅かったし、何かわけわからなかった。来年からは1人ずつしたらどうでしょうかね。全然出席してなかったのにエラソーですいません。でもこういう意見は必要と思う。すみません。
- ・3人の先生がそれぞれ違った分野の話をされて面白かった。この授業を通して、ヨーロッパへのイメージがすごく変わったし、ますます行ってみたくなった。
- ・いたりあについて大変興味がわいたので良かった。またイタリアに行きたい。
- ・主旨があまりわからない講義もあったりして、よくわからないこともあったが、通年だったので授業の雰囲気はわかっていて良かったと思う。
- ・ヨーロッパについて話を聞いてきたけれど、ガイドブックなどを作っているうちに、本当にいきたいなと思った。少しはイタリアルネサンスについて理解できたように思う。
- ・後期になって何となく楽しくなってきた。
- ・前期はグループでの話し合いもあって楽しかった。その分大変なところもあったけど、ヨーロッパについて少しはわかった気がするし、イタリアに1回行ったことがあるけど、また行きたいです。
- ・今までヨーロッパの文化のことなんて全く知らなかったけど、この授業でさらに詳しく学ぶことができて良かった。
- ・色々学べて楽しかった。
- ・話の内容が難しかった。文学や美術とかはまだ身近に感じられるけど、思想はやっぱ難しいと感じました。
- ・授業が時間通りに終わることが少なかったと思う。
- ・色々な美術作品など見れて良かった。
- ・ヨーロッパの文化、美術作品など詳しくわかってよかった。
- ・最終課題(個人)は、パソコン(ワープロ入力)を使うより、レポート用紙で好きなように書くほうが良い。その方が写真や図を貼れて、より充実したレポートになると思う。
- ・もう少し人数と活気があると良いと思う。意欲的にかんばれば、より楽しいものになると思う。
- ・もう少し別館2Fでの授業を増やしてもよかったと思う。映像での説明はわかりやすくてよかった。ビデオは共同研究室の方が見やすい。進み方も特に遅かったり早かったりと感じたこともない。パソコンの使用が多かったが、もう少し台数を増やしてほしい。この授業は自分達で学び、展開していくので、他の教科よりやりがいを感じました。一度く

らいはヨーロッパへ行って芸術品（本物）を見てみたいと思います。

・この授業はAクラスの授業だったので、最初やっていけるか心配でした。でもみんなと仲よくできて、やり終えてよかったと思います。イタリアルネッサンス期の背景を知って、是非その土地へ行って学びたいと思いました。この授業を学んで、イタリアに興味を持ちました。美術館やトレビの泉へ行ってみたいと思います。

・とても幅広い視点から「イタリアルネッサンス」を知ることができてよかったと思う。またイタリアへ行ってみたいものが増えた。このグループは石森さん以外は知らない人だったので、どうなるかと思ったけど、仲よくできたし、気も引き締まったので良かった。他の3人の知識もとても為になった。だから、意外な人とのグループもいいと思う。

## 10. 終わりに

この授業は、これからの短大教育のあり方を考える上で、というよりは、その出発点には、キリスト教科のコース制導入のなかで、将来が心配された「人間文化コース」のカリキュラムの活性化、充実化を図るべく設定されたものである。文学、思想、芸術の分野からの総合化の試みは、これまでの本科のカリキュラム改訂の際に、幾たびか検討されては消えた考え方であったが、コース制導入に踏み切るにあたって（「人間福祉コース」については、ある程度の需要が期待される中で）、特に「人間文化コース」のあり方を検討していく中で、双方向授業の充実化、学生への魅力ある授業科目の提供という課題に応えようとするものであった。

学生アンケートをみれば一定の評価は与えることができるだろうが、2年を経過して振り返ってみて、上の課題に応える科目になったかという点、いくつかの留保を付けなければならないだろう。確かに様々な授業方法を取り入れることで、一定の成果を得る（すなわち学生達は多くの課題に追われながらもそれに応えて、各個人の保存用ファイルや冊子「ヨーロッパ文化総合研究98」など目に見える形で成果を残す）が、もう少し細かく授業に即してみると、学生の主体的授業参加という点で不満が残る。その理由を考えてみるに、その最大の問題は意志疎通の問題であろう。担当者間のそれはもちろんのこと、担当者と学生間のそれも十分に考慮されなければならないだろう。学生の質的变化も言われるが、彼らが授業に臨んでいる動機付けとスタッフ側が授業に臨む動機付けとの間の意志疎通を特に開講初期に図らなければならないように思う。その意志疎通が図られてのち一緒に作り上げるタイプの授業展開が行えるよう、に思う。スタッフ側の伝えたいこと、学んでほしいことを明確にし、学生側がそれを共有することで真に活性化された授業が展開されるだろう。

今まで紹介してきたこの授業の教授方法は最初に断っているように実験的な

試みであるが、それがゆえにこれらの反省点をこれからのさらなる教授法の開発に活かしたいと考えている。

#### [註]

\* この授業のもうひとりのスタッフである森山治夫氏は、今回共同執筆には加わらなかったが前キリスト教科科長でありこの授業の成立に際しての中心メンバーであり、引き続き担当をお願いしながらスタッフ会議での有益な意見を活かしていていることをお断りします。今回も貴重なご意見を寄せて貰いました。

1) 森田保男・大槻博著『大学教授法』(PHP研究所, 1995年) pp.186-187

2) 前掲書 pp.187-188

3) 立命館大学教育科学研究所『立命館教育科学研究12号』(1998年) p.10

4) 鈴木みどり編『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社(1997年)  
p.296

#### [参考・参照図書]

- ・和光大学授業研究会『語りあい見せあい大学授業』(大月書店)
- ・和光大学「大学入門期教育の実践的研究」グループ『大学の授業研究のために－和光大学の場合』(あゆみ出版)
- ・赤堀侃司編『大学授業の技法』(有斐閣選書)
- ・塩谷政憲『学生と授業をつくる－今、ここでの体験学習－』(プレスタイム)